

武者小路実篤における戦争認識の本質

—『ある青年の夢』と『大東亜戦争私感』を中心に—

楊 琇 媚

はじめに

大津山国夫氏は「大正三年以降、武者小路内部の倫理的座標軸は、力と自由をほこる『自然』主義から、愛と連帯をもとめる『人類』主義へ大きく傾斜した。その外因のひとつに第一次世界大戦の勃発と進行をあげなければならない」^①と指摘している。続いて、武者小路の反戦態度がどのようなものであったかは、大正三年の作品『彼が三十の時』を始め、七篇の作品が雄弁に語っているとされており、これらの作品にさらに雑感類を加えれば、彼は第一次世界大戦に最も深くかかわった文学者であったと言ってよい、と述べている。

第一次大戦によって経済的な繁栄がもたらされ、豊かな日常生活に人々が陶醉していた当時の時代背景の中で、武者小路も生涯で最も高揚した時期を迎えることになるが、この頃に反戦を正面に据えて訴えた彼の姿勢は注目に値する。しかしその後の、反戦と平和を初心とした「新しき村」からの離村、そして欧米旅行での屈辱的な経験などを通して彼は、第一次大戦当時に持っていた真摯な反戦態度とは裏腹に、自費出版による『大東亜戦争私感』と戯曲『三笑』を書くなど、次第に非戦論者から戦争協力者へと変貌してしまったのである。

このような武者小路の戦争に対する態度の変化については、これまでも大津山氏や本多秋五氏などの批評家によって問題とされてきた^②。しかし、ここで新たに問題提起したいのは、武者小路のこうした態度の変化とは別に、それに対応した彼の戦争に対する認識というものが、果たしてそれほど変化しているのだろうか、ということである。

本稿では、反戦を主題にした一連の作品の内、最も代表的な作品と思われる戯曲『ある青年の夢』と、戦争に協力的な書物と見なされている『大東亜戦争私感』の両作品を通して、武者小路の戦争認識の本質を考察していきたい。そして、その結果を踏まえた上で、武者小路における戦争への態度とその変容の実態を明らかにしていきたい。

一、『ある青年の夢』における戦争認識

『ある青年の夢』は大正五年から『白樺』に連載され、翌六年に洛陽堂より刊行された作品である。この戯曲は序と四幕からの構成となっている。ある名前を与えられていない青年が見知らぬ者に連れられ、様々な戦争によって災いを被った人々の痛ましさとその戦争の無意味さを見せられるといった内容である。金子洋文氏は以下のように指摘する。

この戯曲には全体の統一がない、また一幕宛をとつて見ても、面白いことは面白いが何となく物足りない感じがする。而しさうした芸術的な批判は、この戯曲に対しては主要なものと思はれない。むしろそれは何うでもいゝ事である、吾々が重要視することは戦争の凄惨と無意味であることを知ることである。(旧字は新字に改めた)^③

つまり、この作品に関しては芸術的価値というよりも、作者の反戦思想にこそ注目すべきだということである。では、武者小路はどのように戦争に反対しているのか。或いは彼はどのように戦争を見ているのか。それらについて、以下に検討していきたい。

①戦争に対する認識—自衛戦争の可能性

序においては、青年と見知らぬ者とが出会う場面が描写されている。見知らぬ者を前にして、青年は「俺はまだお前に逢ふ力はない」、「俺にはまだ力がな

い」と言っており、自分の無力さを絶えず吐露しているところが注目される。第二幕によれば、青年は親のすねをかじっている文士という身分である。また、青年に対して「お前は食ふことには困らない」、「お前は人類的愛と云ふことを口にする。本当の愛を感じたことがあるのか」といった言葉が投げかけられているところから、青年に武者小路自身の姿が投影されていることが推測できる。そして、注意しなければならないことは、見知らぬ者の「お前の考へてゐることは或る範囲から出たことはない」（序）という発言や、女の亡霊の「何にもあなたは本気になつて戦争をなくす必要はおありにならないのでしょ。たゞ戦争の悲惨なことを空想して、そのことをお書きになればそれで良心の満足も得られるし、名誉も金も得られるでしょ」（一幕）といった青年に対する批判の言葉であり、これは武者小路の自己批判を匂わせる部分として興味深いものである。このように、武者小路が自身のことを青年を通して相対化しているという視点が存在するため、青年を作者の分身として見る事が可能であると思われる。

無力な青年を鍛えるため、見知らぬ者は最初に青年を連れて戦争の犠牲者（亡霊）たちが集合する「平和大会」に参加する。平和大会の役割に対する考えを問われた青年は次のように答えている。

軍備拡張をしながら平和論をしなければ今の世には通用しないのですからね。又それも無理のない処もありますからね。うつかりしてゐると敵にせめこまれますからね。そして虐殺されたり、属国にさせられたり、自国の文明を破壊されたり、思想の自由をひどく束縛されたり、なるべく馬鹿な人間が生れるやうに強いられたりしてはたまりませんからね。

戦争を一種の防衛手段として正当化するような青年の発言に対して、見知らぬ者は「それならお前は戦争好きなのか」と言っている。青年は「私は戦争は大嫌いです」と厭戦的な態度を表明しながらも、「しかし属国になるのは

たまりませんからね」とも言っている。ここでは、先述した青年の無力感と対応するかのように、彼から絶対的非戦論者の姿勢を読み取ることはできないのである。

青年が戦争は嫌いだが、属国にされるのは堪らないと言っているのに対して、亡霊五は「戦争をしないでも亡国にならない方法がないとは思ひません。(中略) 自国の物質的利益の為に他国を亡国にすることは不合理なことです」と述べている。つまり、国と国はお互いを尊重し合うことで戦争を防止できるという理想論を主張しているのである。亡霊五は戦争の被害者であるため、当然ながら戦争に反対する存在である。しかし一方で、「国家的エゴイストの戦争は別として、真に我々が認めるべき、戦争の原因はたゞお互に属国にされるのが恐ろしい許りです。戦争は個人、或は国民が認めるべき戦争です。その他の戦争は国民が自ら進んで反対すべきです」(傍点は引用者)とも言っている。つまり、侵略戦争ならば反対すべきであるが、自己防衛のための戦争ならば認めるべきだという態度であり、結局は亡霊五もすべての戦争を否定しているわけではない。

同じような戦争に対する認識が第三幕の第三場の、Aという記号を与えられている青年が、見知らぬものに連れられ仲間たちと出会う夢の場面からもうかがえるように思われる。Aの仲間たちが下級生から喧嘩を売られたために、その復讐で喧嘩をしに行く場面であり、Aにも喧嘩に協力するように求めてきたのである。しかし、Aは次のように述べ、協力を拒否した。

ふだんなら僕も君達と同じやうに喧嘩をする気になつたらう。(中略) しかし僕は今この方につれられて、いろ／＼の事を見て来た許りだ。そして腹の底から、戦争はよくない、自分の内にある、戦争をうむ可能性を吟味してそれを出来たらなくなしたいと考へてゐた処なのだ。其処に君達が出て来たのだ。悪いことは云はない。喧嘩はよし玉へ。僕が和睦の使ひになるから。(第三幕・第三場)

つまり、それまでのAは戦争を否定しない考え方を持っていたのだが、戦争による悲惨さを目撃してきた彼は、できるだけ戦争の発生を阻止したいと考えるようになったのである。そして、彼は仲間たちと下級生たちとの衝突を極力抑えようとしている。しかし、双方とも受けた恥辱に耐えることができなかつたため、結局は喧嘩を止められない結果に至ってしまう。また、調停役を勤めようとしたAは、逆に仲間たちから臆病者やスパイなどという非難をも受けてしまうことになるのである。

最初、Aはその争いを傍観するしかなかったが、やがて相手側が刃物やピストルなどの凶器を持ち出すようになり、Aの仲間たちの間には犠牲者まで出てしまうことになった。そんな状況を見兼ねたAは、ついにはピストルを奪って、ピストルを持つ相手を射殺する行動にまで及んでしまった。さらに、自分を攻撃してくる人に対しても、思わず発砲してしまったのである。こうした夢の中の出来事をすべて目撃した見知らぬ者がAに、「お前はそれでも平和を愛するものか。非戦論者か」と非難するのに対し、Aは見知らぬ者の前に跪きながら、「お許し下さい」と言うところで、この場の幕が閉じるのである。

学校という小さな社会の中で、喧嘩とはいわば小さな戦争と見なしてもよいであろう。Aは暴力に反対する平和提唱者であるはずなのだが、彼は仲間の犠牲を止めるため、また自己防衛のため、自ら戦争の渦中に飛び込んでしまったのである。もちろん、彼が取った行動は正義の行動として、また正当な防衛行動として見ることも可能であろう。逆に言えば、彼がこのような行動を取らなければ、「戦争」(喧嘩)が終結しなかったどころか、仲間側に更なる犠牲者が出ることになっただろうし、彼自身も殺されることになったかもしれないのである。

平和な非戦論者であるはずのAは、自分の殺人行為に対しては懺悔の念をも示しているのだが、このような矛盾した行動を取った彼の意識をどのように解釈すべきなのだろうか。おそらく、戦争の悲惨さを教えられてきた彼は、

反戦の態度を取ることが最も容易かつ当然であると認識していたのかもしれない。しかし、実際に敵が攻めてきた場合には、自分の身を守るためにも仲間を救うためにも、敵と戦わなければならないのである。こうした現実には迫られると、彼も冷静に戦争に反対することができなくなってしまったのであろう。要するに、この夢のエピソードから、Aには戦争（特に自衛戦争や正義の戦争）を完全には否定できない可能性が残されていると考えられる。

前にも青年からは絶対的非戦の態度を読み取れないと述べたが、実はここにおいても同様の姿勢をうかがうことができるのではないと思われる。つまり、作者の分身とも言える青年やAの反戦或いは厭戦の思考の背後には、（わずかではあるかもしれないが）戦争の可能性も潜んでいることを注意しておきたいのである。

②植民地支配に対する認識

第一幕において、亡霊五は「南亜の戦争は英国の恥ぢです。青島の戦争はJ国の恥ぢです。印度人にたいするF国のやり方は反対すべきです。朝鮮にたいするJ国のやり方も僭越です。印度や朝鮮は独立する力がよしないにしろ、その国民の盛になることを恐れるやうな方法をとるのは恥ぢです」と言っており、暗に日本とイギリスなどの各国の植民地支配に対して批判する態度を現している。

一方で、青年は現行の植民地支配の暴力性を批判し、「昔は占領されることは死以上の恐ろしいことでした。しかし占領されることは占領されない時と同じであると云ふ時代がきつと来ます」、「征服者は被征服者の機嫌をとらなければならない時が来ます」と言っており、こうなった時には戦争は不必要または無意味なものとなるため、自然に戦争がなくなる時代が来るというように考えている。そして彼もまた、「奴隷制度を自国民に禁じたやうに、属国民にたいする人間以下なものにたいするやうな態度はあらたむべきです」と言っており、植民地支配の奴隷制度に対する批判的な姿勢を見せている。

しかし、ここで注意すべきなのは、亡霊五もそうであるように青年が批判しているのはあくまでも植民地支配における「暴力性」と「奴隷制度」なのであり、植民地主義そのものへの批判を読み取ることができないということである。極言すれば、植民地支配のやり方によっては、植民地主義の可能性が必ずしもないとは言えないのである。

実際、こうした青年の思考態度は、大正四年に武者小路が書いた「八百人の死刑」という文章からもうかがえると思われる。「八百人の死刑」は台湾で起こった抗日運動「西来庵事件」によって台湾人が処刑されたという新聞報道に接して書かれた文章である。以下、その文章の内容について詳しく見てみよう^④。

自分は新聞を見てみてふと欄外に台湾の土人が八百人程死刑になることを読んだ。随分ひどいと思つた。しかしその時はたゞひどいだけ思つて、さう気にならなかつた。(中略)しかし少し前に歩いてゐて急にたまらないことだと思つた。自分は興奮して来た。自分は涙ぐんだ。

これは「八百人の死刑」を執筆した動機を如実に語ったものである。つまり、武者小路は一時の感情に促され、「死刑」という反人道的行為に怒りを感じたために執筆したわけである。

- a、一たい彼等は日本人ではないのか。窮鼠が猫をかむとする。それは鼠に罪があるのか。土人を殺さずに内地人に親しますことの出来ないのは誰の罪でもないのか。
- b、もしそんな人間が台湾を政めてゐるとしたら土人は可哀さうだ。そんなことを敢てする大和民族が恐ろしい。
- c、殺すことをもつておびやかすことはよくない。少くも二三年は様子を見てやれ、考へてやれ。無雑作な感じを与へるやうな殺し方はよす方がいい。彼等は帰順することを誓はないのか。当路の人は恩威ならび行つ

たのか。自己の方の咎を棚に上げて他人の生命を断ち切るやうな真似はするな。どう考へても数百人の人を殺すことを道理に叶つてゐると思へない。

以上の引用は、武者小路が人道的立場に立って、台湾人に対する日本の統治の残酷性と暴力性を容赦なく批判している姿勢である。しかし一方で、その批判の視線が日本政府の台湾に対する植民地支配にまでは届いていないこともうかがえる^⑤。つまり、彼の批判は反政府・反軍国主義といった激烈なものではなく、あくまでも反人道的行為に対する感性的な意見に止まっていると言えよう。

武者小路がもっぱら人道的・理想主義的な立場からのみで「暴力性」と「奴隷制度」をもつ植民地支配を批判したため、植民地主義体制そのものの是非に対する彼の姿勢は極めて不明確なものとなったことは否定できないであろう。そして、彼のこのような不明確・不徹底な態度が、後に反戦思想から戦争協力へと変貌していった一因としても考えることができると思われる。

③反戦作品としての限界

武者小路は青年の目を通して、戦争の犠牲者や間接的な被害者たちの悲惨な姿を描き、そこから反戦思想を鼓吹している。しかし一方で、彼は自衛戦争及び非暴力による植民地支配の可能性をも提示している。また、彼は青年の口を借りて「国家主義から戦争は必然の結果として生ずるものです。自国の利益のみをはかり、又自国の利益をのみはかることがいゝことになつてゐる今の時代では戦争がなくならないのは当然すぎます」と国家主義の弊害を暴露しようとする。しかし、宗像和重氏が指摘するように、

戦争が国家主義からの必然の結果であるという青年の洞察は、ただちに「国家をすて」るための具体的なビジョンに接続しているわけではないことに、注意しなければならない。青年がわずかに提唱するのは、「我々が

国家的立場で物を見ずに、人類の立場でものを見ること」であり、「人々
は人類の意志を尊重することを知らないからいけない」ということであっ
て、いわば「渾然とした自他の一致」への希求に深く根ざした、「人類の
意志」の尊重ということにはかならないのである^⑥。

つまり、見知らぬものから「国家をすてろ」と要求された青年は、ただ「私
にその力はありません」としか答えられず、その青年の無力感と同じように、
武者小路自身も国家の存在を否定することができていなかったのである。もち
ろん、国家の存在を否定することは容易なことではない。だからこそ、彼にで
きるのは人類の意志を尊重するようにと人間に向かって呼びかけることだけな
のである。そのため、本作品では人間性の改造への祈念という問題の方に、作
者が関心の重点を置いていることが明らかであろう^⑦。

しかし、戦争という複雑な問題を人道的な観点からばかり捉えると、現実を
切り捨てた観念論・理想論になり兼ねないことは否定し難いであろう。そのた
め、『ある青年の夢』は反戦的作品と言われてはいるものの、実際には反帝
国・反軍国主義の作品としての役割を十分には果たしていないように思われる。

ともかく、非戦・反戦を主張している裏側で、実際には支配のやり方によっ
て植民地制度の可能性が残されていることとか、場合によっては、戦争の可能
性が残存していることなどは、武者小路の戦争観を考察する上では見過ごすこ
とのできない問題である。なぜなら、これらの問題は後の第二次大戦時に武者
小路が戦争協力者へと転向していく原因を考察する際に、重要な手がかりとな
ると考えられるからである。

以上、『ある青年の夢』において、武者小路がどのように戦争に反対してい
るのかを見てきたが、次は見方を変えて、彼がどのように戦争に協力していっ
たのかを『大東亜戦争私感』を通して見ていきたい。

二、『大東亜戦争私感』における戦争認識

『大東亜戦争私感』は昭和十七年五月に河出書房により刊行された作品である。序と二十五編の短文から構成されている『大東亜戦争私感』には、どのような主張が見られるのか。その主な内容を以下のようにまとめておく。

①日本人の優越意識と帝国讃美

「日本人はなぜ強いか」：〈日本はなぜ強いか。日本は外国に比較して一致団結の力が強いことが第一に挙げられると思ふ。／これは日本の国体の御かげである。／日本人ならば誰も感じてゐる。／天皇陛下の国民全部は臣民として、心から奉仕することで、我等は心を一つにしてゐる。〉（一）〈日本人の強いのは生れつきである。日本人は名誉心が強く、瘦我慢が強い。苦勞に耐へる。そのくせ、いざといふ時は死の覚悟をして突進の出来る性質だ。生命知らずになりやすい性質を持つてゐる、之が戦争する時は大いに役に立つのではないかと思ふ。〉（六）

「未来の東京の夢」：〈ここで自分は未来の東京の夢を語らしてもらひたい。（略）／大東亜戦争は今の僕に大きな夢を見させてくれる。〉（一）〈東京は日本の帝都である。この帝都が亜細亜第一の文化の中心地になるのは当然のことである。（略）／東京は亜細亜の軍備の中心、学術、文化の中心、東亜の人は一度は東京に来なければ話が出来ないといふことにしたい。（略）／大東亜戦争の完成は同時に／天皇陛下の居られる帝都が、亜細亜全体の精神的中心にならねばならない。だから東京は亜細亜第一の完全な都市にならなければならない。〉（二）

②アジアを解放する戦争

「日本の使命」：〈日本の使命は東亜を真の東亜にし、東亜民族が米英人から軽蔑されず、本来の生命を益々忠実に生かせるやうにすることである。／実にいい国であり、取つておきの国で、いざといふ時に立ち上つて、亜細亜を解放

するために用意された国と見るべきである。〉(一)〈そのかはり我等も強くなるのは、正義の為であつて、利慾の為であつてはならない。米英の真似して搾取することを望んではならない。〉(三)

「大東亜戦争」：〈(前略)そして日本の為に戦ふことが、東亜の解放を意味し、亜細亜の光栄の為に戦つてゐることになる。／こんな気持ちのいい、美しい戦争が、嘗て地上に行はれたか(略)／実に米英をやつつけて、手も足も出なくすることは痛快である。そして香港、マレーは既に解放し、フィリッピンも九分九厘独立させた。この本が出る時分は完全に独立させることが出来てゐると思ふ。〉(二)〈実際、今度の大東亜戦争ほど、美しい目的を持つ戦争はないのだと言ひたい。領土的野心があるのではない。東亜の諸国を解放してあげようといふ戦争だ。勿論、これは日本の為にもなることを意味してゐる。何処までも、共存共栄の精神によることが必要である。〉(五)

三、両作品における共通性

- a、しかし僕は欧米を侵略したいとは思はない。しかし米英がいつまでも日本を敵に廻して、しつこく日本をやつつけようとしたら、ワシントン、ロンドンまでも進撃することが必要になるかも知れない。(「大東亜戦争」(一))
- b、戦争は実際大へんなものだと思ふ。(中略)／国の存亡、東亜ののるかそるかの堺をふみ越えて進まねばならない勇士の行動心事は、とても経験しないものには想像が出来ない。(「コタバル敵前上陸」)

上記の二つの引用から、武者小路は大東亜戦争をアジアを解放するための戦争として見なしているのみならず、日本の自己防衛の戦争として見ていることが分かる。また、彼は「僕は今でも平和を愛する。愛しすぎる位だ。／しかし卑屈な平和、正義に反する平和、敗北主義の平和は閉口だ。／米英人に命令されるのは、死ぬより嫌ひだ」(「断片」)と述べており、日本の敗戦からもたら

される勝利国による支配の恐怖を想像することによって、戦争の正当性を訴えている。一方、『ある青年の夢』の場合、すでに述べたように、青年は戦争が大嫌いだと言いながらも、「しかし属国になるのはたまりません」といった発言をしており、彼が自衛による戦争の可能性を肯定していることが分かる。つまり、戦争は自ら好んで起すものではないのだが、敵に攻められれば、自分たちの身を守るために、戦争をすることもやむを得ないことであるといった主旨が両作品の共通点として浮かび上がってくるのである。

また「日本の使命」では、「一部の欧米人は自分達が少し早く物質的文明を生み出したことで、つまり武器の優秀と文明の利器を発明したために、暴力的に他の人種を押へつけ、遂に少数の欧米人が多数の亜細亜人種を奴隷あつかひして、今日の彼等の文明を築きあげたのである」と記している。これは、欧米の植民地支配における暴力性と奴隷制度を批判したものである。同じように、『ある青年の夢』においても、日本を含めた各国の植民地支配における暴力性と奴隷制度に対する青年の批判の姿勢については、すでに述べた通りである。つまり、この点に関しても、両作品にはほぼ同じ傾向が見られるのである。ただ、『大東亜戦争私感』では日本が批判の対象外となっているという変化が見られるが、しかしこれは武者小路が大東亜戦争をアジアを解放する「聖戦」として見ていたためであることは言うまでもない。したがって、「日本人の義侠心は今後ますます美しく生かさねばならないのだ。日本はますます責任をもつて東亜を米英の侵略から保護しなければならない」（「日本人の長所と短所一大いなる春」）と書いているように、日本や日本人の正義を称える文章が多いことも特徴的である。

『大東亜戦争私感』では、大東亜戦争を是認する一方で、平和を願う気持ちも失ってはいないのである。このことについては、前にも例を挙げたが、ここでは、さらにいくつかの文章を取り上げて、詳しく見ていきたい。

a、何度も言ふが、日本は最後まで取つておかれた国である。そして、こ

の国が立ち上ることで、世界は新しい秩序に入ることが出来、亜細亜が新しく生れ、世界は亜欧米の鼎立で、永遠の平和が生れ得る希望をもつことが出来、人類は共存共栄の実をあげる事が出来るのである。（「日本人の使命」(二)）

b、日本は益々強くなるであらう。今度こそ日本を敵に廻すことを米英は恐れるであらう。今度こそ本当の平和がくるであらう。／しかもその平和はいちけた平和ではなく、亜細亜全体を救ふことが出来た暁に得る平和だ。恐らく印度が独立し、日本と仲よくなつたあとでくる平和であらう。（「大東亜共栄圏」(三)）

c、(前略)しかし医者は病人がないほど名誉に思ふべきであり、軍人は相手が戦争する気になれなくするのが最上の名誉である。／今後、日本はこの名誉ある平和を獲得すべきで、それまで徹底して強さを発揮すべきだ。（「大東亜戦争のその後にくるもの」(四)）

こうした引用からは、武者小路が大東亜戦争をアジアないし世界の平和の獲得に繋がるものとして認識していたことが分かる。つまり、彼にとっては大東亜戦争と平和の間には相関関係が存在しているのである。特に、「軍人は相手が戦争する気になれなくするのが最上の名誉である」と記していることから分かるように、武者小路は大東亜戦争を肯定する立場に立っているとはいえ、彼が決して好戦的ではないことに注意したい。こうした認識は『ある青年の夢』の第三幕・第三場における夢の中の「喧嘩」におけるAの行動にも似通う部分である。すなわち、戦争には反対であるものの、一旦戦争が発生した場合には、相手を圧倒してしまうことこそが、戦争を早く終わらせ、平和を訪れさせる方法だと考えているのである。

以上のように、『ある青年の夢』と『大東亜戦争私感』には、いくつかの共通点が存在していることが明らかとなった。従来、『ある青年の夢』は反戦的な作品として、また『大東亜戦争私感』は戦争に協力的な作品として読まれて

きたため、武者小路の思考態度が大きく変化したと問題視されてきたのである。しかし、これまで見てきたように両作品の比較分析から見れば、彼の人道的立場や平和への祈念などという姿勢にはほとんど変化が見られないのである。また、『ある青年の夢』の中から読み取ることができる武者小路の戦争に対する認識が、実際にはほぼそのまま『大東亜戦争私感』に受け継がれていることが明らかになるであろう。

四、戦争への態度とその変容の要因

第一次大戦が始まった直後、武者小路は「又戦争か」と題する文章を書いている。

『戦争か／戦争か／又戦争か／予は戦争に反対せざるべし、／されど賛成せざるべし』／自分は四五年前迄は沈黙せる非戦論者であつた。絶対的非戦論の信者であつた。今は絶対的非戦論者ではない。だが主戦論者では元よりない。^⑧

大津山氏は武者小路が戦争に賛成ではないのに、なぜ明確な反対の姿勢を示さないのかという問題を提示し、以下の三つの理由をあげて考察を行っている。^⑨

第一は、『『人類』の奥ふかい叡智にたいする全幅の信仰、いいかえれば、人類の生長、人類史の進歩にたいする無限の信頼があつた』ということである。第二は、「国家エゴイズムの超克を保証する新しい制度、すなわち武者小路的『人類』主義の優位を保証する新しい制度の青写真がまだ彼のなかで像を結んでいなかったことである」。第三は、「民族への本能的愛情があつたこと、したがっていわゆる敗戦主義に同調できなかったことである」。しかし米山禎一氏はこの三つの理由とは別に、新たに「第四の理由」を提起し、それは「『殺しにくるものを殺すことを正当』とする自衛戦争或は抵抗権の考え方を」「武者

小路が個人にも国家にも付与していたこと^⑩」であると述べている。そして、その一例として米山氏は、武者小路が大正八年に書いた「へんな原稿」の中の、「もつとへ人道のため、真理のため、正義のため、世界同胞の為の戦争を始めろ、さうすれば俺もゆくぞ、威張って」という一文に注目し、注意を払っている。

大津山氏が指摘した第一の理由に関しては、確かに『ある青年の夢』の第四幕において、悪魔と神が人類が戦争を起したがっていることについて口論する場面からうかがえる。悪魔が人類は戦争によって滅亡するはずであると主張しているのに対して、神は「まだへ人間は完全ぢやない。人間はもつと苦しまなければならない、犠牲者になる人間は見ぢめた。しかし人間は滅亡はしない、退歩もしない。一歩々々自分のしなければならないことを自覚してゆくだらう。そして自分の内に行はれてゐる不合理なことを段々感じてゆくだらう」と反論している。ここでは、神が戦争によって人類に生長と進歩がもたらされることに期待している姿勢が見受けられる。実際のところ、神は「人間があまりに早く完全無欠なものになるのを俺はあまり喜んではしないのだ」とも言っている。この言葉に対して、大津山氏は「愚かさこそ人類の進歩の源泉、という武者小路の逆説を表現したものであった」と解釈している。

しかし、武者小路が戦争というものに対してそのような役割を期待しているならば、すべての戦争が人類にとって何らかのプラス効果を持っていると考えていることになってしまうであろう。だとすれば、せつかくの戦争批判が弱められてしまい、『ある青年の夢』が深い反戦作品にはなり得ないことになってしまうのではないと思われる。

次に、第二の理由について大津山氏が加えた説明では、「国家こそ人類にたいする諸悪の源泉であるのに、国家は国民の首を扼しながら、万年政権を謳歌している。(中略)しかし、国家主義と無縁の国、『ある青年の夢』にいう『人類的国家』は、いつ、どのようにして地上に建設されるのか、当時の武者小路にはわからなかった」と述べている。そして続けて、以下のような見解を提示

している。

トルストイ的な反戦論を拒んだ者の責任として、彼は自前の反戦構想を建てなければならないのだが、彼にいえるのは、兵役にも、「ゆかなければならぬゆけ」、しかし、「あはよくば自分の内の愛を生かせ」、「力を養つて、いざと云ふ時を待て」（「未能力者の仲間」の先生のことば）ということだけであった。煮えきらぬ態度をトルストイに笑われることは、彼自身がよく知っている。だが、彼には未能力者という自己規定を万能の免罪符とする以外に手だてがなかった。（傍点は原文のまま）

つまり、当時の武者小路は国家の弊害を見抜いていたものの、有害無益な国家の存在を否定し、「人類的国家」を地上に建設させる能力を有していなかったため、戦争に反対することができなかったということである。しかし、大津山氏が指摘した武者小路の「煮えきらぬ態度」こそが、注意しなければならないことなのである。

筆者は大津山氏が述べた三つの理由、そして米山氏が加えた四つ目の理由はそのまま武者小路が反戦から戦争協力へと変貌した要因となっているのではないかと考えている。

まず、第一の理由に見られる戦争批判の不徹底さと曖昧さ、第二の理由にある「煮えきらぬ態度」に関しては、これが後の戦争肯定に走ってしまう導火線になっているものと考えられる。そして、第三と第四の理由に見られる敗戦主義に同調できない考え方と自衛戦争を正当なものとする主張は、まさしく先に見てきた『大東亜戦争私感』における戦争認識に当てはまるものと思われる。要するに、大東亜戦争とは正義の戦いであり、自衛のための戦いでもあるとして認識していたため、武者小路は当然のこととして、この戦争を肯定したのである。

第一次大戦の際には、まだ言論統制が実施されていなかったため、武者小路

はこの戦争が有している侵略性の本質を正しく認識することができていたようである。また日本本土が戦場とはならなかったので、容易に戦争を批判することも可能だったのである。ただし、彼が批判しているのが戦争そのものではなく、あくまでも「侵略」戦争に止まっていること、また彼がひたすら人道的な立場に立って、戦争の非人道性にばかり目を向けていることには注意が必要である。

第二次大戦になると、言論が統制されるようになり、彼は間違った情報によって大東亜戦争を自衛のための戦争として認識するようになってしまった。認識そのものが間違っていたため、武者小路は欧米のアジアに対する植民地支配から、アジアを解放するのだという国策に同調してしまったのである。本研究では、歴史の真偽の問題に言及するつもりはないが、武者小路が第一次大戦の頃に持っていた戦争に対する認識が、本質的には変化しなくても、その後の大東亜戦争を肯定する態度へと変容していくことが可能であった過程を、以上の考察によって明白にすることができたのではないかと考えている。

終わりに

小田切秀雄氏は「文学における戦争責任の追求」と題する文章の中で、次のような指摘を行っている。

（前略）また、粗雑な人間主義やヒューマニズムによつて今次戦争の本質をとりちがへ、そのことで侵略戦争を人間とかヒューマニティの名で飾り立て、世の柔軟な心をもつ若い人々を戦争へ駆り立てた文学者はみななかったか。そして更に、たとへ戦争をおのづからなる現実の動きだとしてやむなく肯定してしまつたのであつたとしても、その肯定したといふことで若い文学的世代を戦争肯定へ押しやるに力の大であつたといふやうな文学者はいるなかつたか。（旧字は新字に改めた）^①

小田切氏が取り上げた主要な戦争責任者の中には、武者小路も含まれている。そして「粗雑な人間主義やヒューマニズムによつて今次戦争の本質をとりちがへ……」という部分は、特に武者小路を指しているわけではないが、『大東亜戦争私感』を見る限り、これは暗に武者小路を批判しているようにも読み取れる。しかし、米山氏は武者小路が日中戦争以後に、自己改造を続けていく姿勢を崩すようになり、ひいては歴史的洞察力を失うに至った主な原因を、欧米旅行中に言葉の不自由さを感じ、また人種差別を体験することによって白色人種に対する不信を増大させたことにあると考えている。そのため、ヒューマニズムが武者小路を誤らせたのではなく、自然に生成した欧米に対する怒りこそが彼を誤らせたのだという意見を示している¹²。

もちろん、欧米旅行中に武者小路自身が白人による人種差別を実感したことは、彼の反欧米意識を助長させてしまったと考えられるであろう。しかし、たとえ彼が欧米旅行をしなかったとしても、或いは旅行中の彼が差別を受けていなかったとしても、武者小路が一貫した人道的な主張をもって、間違った認識のもとで大東亜戦争を支持した可能性は大きいのではないかと考えられる。

米山氏は武者小路が「人種平等」の理念を旗印にしていたと指摘するが¹³、それは武者小路が「新しき村」時代に唱え続けた「万民平等」といった理念と同質のものであろう。

確かに、『大東亜戦争私感』では、欧米に対して、「亜欧米」の平等を訴えているという一面が見られる。しかし他方では、同じく亜細亜の国に対して日本の優越性を強調するという一面も見せているのである。

ジョン・ダワーによれば、古代から大和民族に特有の存在であった天皇は、最も高潔な家長として認識され、天皇中心の家族理念も古くから伝わってきた。そして戦時中においても、臣民に家族理念を信奉させるために、今上天皇裕仁は理想化された人格を体現するものとされていたという¹⁴。天皇を頂点とする家父長制国家であった日本の「家族制度」とは、そもそもこうした階級や性差などといった不平等な関係を内包していたのである。このような「家族制度」の

概念が「大東亜共栄圏」の政策にも応用されたことを考えれば、そこに「不平等」という問題が浮かび上がってくることは当然のことであった。共栄圏政策を是認した武者小路は、どこまでその「不平等」という問題に気づき、考えていたのであろうか。

実際、『大東亜戦争私感』の中には、南洋の島を「占領」したことによって、「土地は日本のものにしないうしろ、其処の産物は自由を買ふことが出来るやうになつた」(「資源豊富」というような記述も見られる。そもそも、第二次世界大戦以前には、東南アジア諸国のほとんどは欧米帝国主義の植民地として、その従属物としての地位や役割を強いられてきた。欧米帝国主義は、東南アジアをただ彼らの原料獲得、商品販売や投資市場として利用し、そこから利益を引き出すことに専念していた。もちろん、武者小路は欧米と同じような詐取の手段は使用しないと書いてはいるが、しかしその意識の根本にある、東南アジアを従属物として見なし、彼らが所有している豊富な資源を利用しようとする認識は、欧米帝国の場合とほとんど変わらない発想なのではないかと思われる。

また、「大東亜戦争のその後にくるもの」と題する文章においても、同じ調子で次のように書いている。

大東亜戦争には何か大きな目的を持ちたい。／そしてその目的に向つて大東亜共栄圏がもり上り、その頂上に帝都の東京を置き、其処に最高学府と、大研究所をつくり、共栄圏の最高頭脳をここに集め、(中略)その国をどういふ風にしたらいいか、又国と国との特色をお互に調和させてどう生かしたらいいかを研究することにし、その方針を実地に適するやうにはその国の政府が臨機応変に処理するが、大方針は東京できめることにしたい。

(二) (傍線は引用者)

この文面からは、確かに「大東亜共栄圏」という政策がアジア各国の繁栄発展のために作られたものだという意味を読み取ることができる。また、その続

きにおいては「これは決して他国を日本の属国にすることを意味しない。日本人は他国人と平等だ」とも述べている。しかし、傍線部の意味に注目すれば、日本がアジアの国々の主導権を握ろうとし、アジアの国々を支配しようとしていることは明白である。つまり、共生共栄という言葉とは裏腹に、日本は支配者の側に立っているのであり、解放されると言われるアジア各国は、結局のところ欧米帝国の代わりに、今度は大日本帝国に支配されてしまうという構図ができあがっていると思われるのである。このように見てくると、武者小路は「エスノセントリズム」（自民族中心主義）という観念の持ち主に他ならない。

「大東亜共栄圏」政策に潜む不平等な要素や、そのような政策を是認していた武者小路の発言から感じられる差別という意識を見逃すことはできない。彼の視線は欧米に向けられていたのであり、アジア諸国が日本と同じ立場に置かれてはいなかったことを考えると、米山氏が指摘している「人種平等」の観念と武者小路自身が言う「万民平等」という意識における「平等」の本質には、かなりの差異が感じられるのである。こうしたことから、武者小路の平等主義というものの意味を再検討する余地が残されているように思われるのである。

* 『ある青年の夢』の引用は、小学館版『武者小路実篤全集第二巻』（昭和六十三年二月）による。また『大東亜戦争私感』の引用は、小学館版『武者小路実篤全集第十五巻』（平成二年八月）による。

【注】

- ① 大津山国夫『『人類』と国家』（『武者小路実篤論——「新しき村」まで——』東京大学出版会、昭和四十九年二月）
- ② 例えば、本多秋五氏は次のように語っている。「第一次大戦の当時、『人類』に奉仕するものとして、詩のように調子の高い長い長い戯曲『ある青年の夢』を書き、戦争が才能ある青年男女の運命を狂わす悲惨を『その妹』に書いた、反戦平和主義の人が、どうしてこういう熱狂的な戦争讃美者になったか、これが謎である。」（「解説」『武者小路実篤全集第十五巻』小学館、平成二年八月）また、大津山氏でさえも以下のように容赦のない批判を投げかけている。「同胞の運命に無関心でいることのできなかった武者小路は、かえって同胞の錯誤に拍車をかけ、結果として同胞の未来にたいして償いがたい過失をおかしてしまった。情況に埋没して歴史的洞察力を喪失した彼の去就は、悲惨というほかない。（中略）日中戦争以後の武者小路は、ほかのなにかであったにしても、すくなくとも思想家ではない。また、思想家として遇してはならない。」（同前掲書）

- ③金子洋文『生ける武者小路実篤』（種蒔き社、大正十一年十月）。引用は〔復刻版〕（日本図書センター、平成五年六月）による。
- ④武者小路実篤「八百人の死刑」（『白樺』大正四年十一月）。引用は『武者小路実篤全集第三巻』（小学館、昭和六十三年四月）による
- ⑤王泰雄氏は、「八百人の死刑」は武者小路の台湾人に対する「人道的同情と社会的義憤の発露であるが、日本の植民地政策に対する根本的な批判意識は欠如している」と指摘し、卓見を示している。しかし続けて、彼は、武者小路の言説には「植民地支配には肯定的思考を持ったまま、『人命を害してはだめだ』、という矛盾した漠然とした理想主義的立場、〈人を殺すため^で植民地はだめだ〉、〈戦争が悪いのは人を殺すためである〉という発想を持っていた」と述べている。（『武者小路実篤の思想と文学（1）——武者小路実篤の植民地認識を中心に——』『文芸と批評』平成十二年五月）周知のように、台湾が日本の植民地になったのは明治二十七年の日清戦争の時であり、清国の敗戦がその原因である。その後、すでに二十年近くも植民地統治が続いていたため、日本人の中には台湾は日本の一部であるといった認識が普遍的となっていた可能性が高い。武者小路の場合、日清戦争の時はまだ九歳であったため、歴史を認識する能力がまだ形成されていなかった頃である。「一たい彼等は日本人ではないのか」、「彼等は帰順することを誓はないのか」といった発言は確かに一見すると、日本の台湾に対する植民地支配を肯定しているかのように読み取ることが可能かもしれない。しかし、上述した歴史的背景というものを配慮に入れて考えれば、武者小路が日本の植民地支配を批判しないからといって、直ちに彼が植民地支配を肯定しているのだと決め付けてしまうことは、あまりにも短絡的であるように思われる。
- ⑥宗像和重『『ある青年の夢』—『大正的』なるもの』（『国文学解釈と鑑賞』平成十一年二月）
- ⑦楊英華氏は『ある青年の夢』の主題について、次のように述べている。『『ある青年の夢』は、人間性を追求する反戦作品であると同時に、戦争を無くすには、人類、人間がまず自我を改造しなければならぬという〈人間性改造書〉なのである。言い換えれば、理想的な人間像に向かって一歩でも近づくように願ってやまない姿勢がこの作品を大きく実らせたのである。』（楊英華『武者小路実篤と魯迅一戯曲『ある青年の夢』をめぐって—』『文学・語学』平成十五年十月）
- ⑧武者小路実篤「又戦争か」（『エゴ』大正三年九月）。引用は『武者小路実篤全集第三巻』（小学館、昭和六十三年四月）による。
- ⑨注①に同じ
- ⑩米山禎一「人種差別への怒りと超越主義の崩壊」（『武者小路実篤—日本の超越主義者—』台湾・大新書局、昭和六十一年三月）
- ⑪小田切秀雄「文学における戦争責任の追求」（『新日本文学』昭和二十一年六月）。引用は大久保典夫他編『戦後文学論争上巻』（番町書房、昭和四十七年十月）による。
- ⑫注⑩に同じ
- ⑬米山禎一『武者小路実篤—日本の超越主義者—』（同前掲書）
- ⑭ジョン・タワー『人種偏見——太平洋戦争に見る日米摩擦の底流』（斎藤元一訳）（株式会社ティビエス・ブリタニカ、昭和六十二年九月）

* 討議要旨

坪井秀人氏は、戦争認識の中で、何故武者小路を取り上げたかと尋ねた。発表者は、武者小路の万民平等の理念が作品の中でどう生かされているかと思い研究したと答えた。

スティーブン・ドッド氏は、白樺派で他に反戦的な人はいるかと尋ねた。発表者は、志賀直哉や高村光太郎（白樺派の人ではないが、白樺と交流がある）は戦争に協力的な文章を書いていたと述べた。

関礼子氏は反戦と非戦の定義を尋ねた。発表者は反戦の方が強いと答えた。

ノリコ・トゥンマン氏は武者小路が戦後書いた物はどう変わったかを尋ねた。発表者は人類愛、人道主義の物を書き続けたと述べた。

エドゥアルド・クロッペンシュタイン氏は、武者小路は読む価値があるかと尋ねた。発表者は、おそらく、読む価値はあると答え、また、立派な思想家として有名だったのでそれを疑問に思い研究を始めたと述べた。